

## 複式学級担当者からのアドバイス

Q 1 異学年で行う生活科をどう進めればよいですか。

A 1

生活科の目標、内容は、2学年共通で示されていることを生かし、2学年同単元（A・B年度方式）で指導するとよいでしょう。ただし、1年生と2年生の発達の違いや児童の実態に応じて、目標や活動の程度を考慮しましょう。

指導計画の立て方の一つとして、内容をA・B年度に分け、異なる単元（例：A「なつとなかよし」 B「まちたんけん」）と、毎年実施する共通単元（例：「がっこうたんけん」）とで構成する方法があります。

### A・B年度方式で異なる単元の展開例

A年度：近隣の公園へ繰り返し出掛ける活動を中心にした単元

[内容（4）公共物や公共施設の利用、内容（5）季節の変化と生活]

[ねらい] 四季の変化を感じたり、公共施設を利用しながら、みんなで使うものがあることやそれを支えている人がいることに気付く。

B年度：地域を繰り返し探検する活動を中心にした単元

[内容（3）地域と生活、内容（8）生活や出来事の交流]

[ねらい] 身近な人々と進んで交流する楽しさに気付くとともに、地域に親しみや愛着をもつ。

### 毎年実施する共通単元の展開例

○「がっこうたんけん」[内容（1）学校と生活]

[留意点] 単元の目標や活動の内容を学年段階に応じたものとする。例えば、学校探検をする際に、2年生には探検の計画を立てさせ、案内役を務めさせる。自分の成長に気付かせることをねらいの一つとする。など

○「つくってあそぼう」

[内容（5）季節の変化と生活、内容（6）自然やものを使った遊び]

[留意点] 1年生は採集した自然物を使っておもちゃを作り、2年生は動くおもちゃを作るなど、活動の程度に変化をもたせる。

○「大きくなあれ」[内容（7）動植物の飼育・栽培]

[留意点] 1年生は、アサガオなど花の栽培をし、2年生は、野菜の栽培をするなど、対象を変える。または、どちらも同じように花も野菜も栽培しながら、前年度の経験を生かして、違う種類、異なる栽培方法などに挑戦するといった活動を展開する。

単元を構成する際には、内容構成の11の具体的な視点と15の学習対象がどのように組み合わせられているか、十分配慮するようにしましょう。

## Q2 5・6年生の複式での外国語活動をどう進めればよいですか。

### A2

他の教科と同様に、まずは、学年別で指導を行うのか、AB年度方式で指導するのかを話し合しましょう。その際、本年度の指導のしやすさだけを考えるのではなく、次年度以降の指導も考慮し、利点と課題点を踏まえて検討しましょう。ただし、外国語活動は、コミュニケーションが主たる活動となるため、同一教室内での学年別の指導は難しいと思われます。

独自の年間指導計画を作成する場合は、学習指導要領に書かれている配慮事項に気を付けて作成してください。ここでは、AB年度方式で指導する例を紹介します。

#### 【A小学校の年間指導計画の例】

単元	A年度	時数	単元	B年度	時数
1	世界の「こんにちは」を知ろう	3	1	世界の「こんにちは」を知ろう	3
2	アルファベットで遊ぼう	4	2	アルファベットで遊ぼう	4
3	ジェスチャーをしよう	4	3	数で遊ぼう	4
4	カレンダーを作ろう	4	4	できることを紹介しよう	4
5	自己紹介をしよう	4	5	外来語を知ろう	4
6	いろいろな国の衣装を知ろう	4	6	クイズ大会をしよう	4
7	道案内をしよう	4	7	行ってみたい国を紹介しよう	4
8	時間割を作ろう	4	8	ランチ・メニューを作ろう	4
9	将来の夢を紹介しよう	4	9	オリジナルの劇をつくろう	4

## Q3 課題を与え、他学年の方に「わたり」をして帰ってきたときに、自学ができずにほとんど課題ができていません。何かいい方法はありませんか。

### A3

原因としては、「①指示や発問を理解できていない」、「②学習内容が理解（定着）できておらず、どのように解決すればよいのか分からない」ということが考えられます。

#### ①について

何についてどんな方法で解決していけばよいのか、具体的な学習の手順を示したもの(ガイド)を提示し、個別にまたは子どもたちで相談しながら進めていけるようにする。

#### ②について

ヒントカードや能力に応じたワークシートを工夫するなどし、必ず自力解決ができるように準備をしておく。それでも難しい場合は、友達と相談してもよいということにする。できればそうならないように、直接指導(課題提示)の際に自力解決に必要なことがらをしっかり押さえておく。

いずれも、1時間の流れと子どもの実態を見通した上で準備をしなければならないので教師の負担は大きくなりますが、この手間を惜しまなければ授業はスムーズに流れるので、進度に影響を及ぼす心配がなくなり、子どもにとっても教師にとっても最善の方法になります。

**Q 4** 1学年の児童数が少なく、意見や感想の交流ができる機会がとても少ないです。何かいい方法はありませんか。

A 4

2名いれば、あらゆる場で、意見、感想の交流、思いを伝え合う機会は自然と生じてきます。

**【交流機会を増やす例】**

- ・インターネット等を利用したテレビ会議システム
- ・ビデオレター、手紙、ファックスなど機器を活用した情報交換
- ・参観日等を活用し、保護者や地域の方との交流の充実
- ・近隣の小学校や幼稚園・保育所との異学年・異年齢交流、全校児童による異学年交流

人数が少ないため、多様な意見にふれることは難しいかもしれませんが、「何をどう伝えるか、伝え合ったことをどう受け止め、どのように生かすか」といったところに重点をおくと、雑談であっても意義のある交流の機会となると考えます。そのためには、「相手に伝えるためのポイント」「自分の考えを伝えるときのポイント」といった手引きを作成し、児童に思いを伝え合うための様々な視点を与えることが必要になってくると思います。

**【少人数での交流を充実させるための手立ての例】**

場面	準備	ポイント
自分の考えを伝える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵、図、表などを使って分かりやすくまとめよう。</li> <li>・前に見つけた考え方を使って分かりやすくしよう。</li> <li>・色分けをして分かりやすく整理しよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・始めに何を使って考えたか話そう。</li> <li>・伝えるときは「ここまでいいですか」など、相手に確かめながら話そう。</li> <li>・話すだけでなく、矢印を書き入れたり、ものを動かしたりして、伝える工夫をしよう。</li> <li>・質問に答えたり、気が付いたことを付けたしたりしながら話し合おう。</li> </ul>
相手の考えを聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話す人がどんな方法で考えたのか確かめよう。</li> <li>・自分の方法と同じところや、違うところを見つけよう。</li> <li>・聞きながら分かったらうなずいたり、相づちを打ったりして相手に自分が分かったことを伝えよう。</li> <li>・気が付いたことや考えたことをメモしておいて、質問したり、発表したりしよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞きながら分かったことは「～だよな」「～ということですね」など、相手に確かめよう。</li> <li>・自分と同じ考えのときは、「～のところが同じです」と発言したり、分からないところは質問したりしよう。</li> <li>・聞いて終わりではなく、質問をしたり、聞いて見つけたことや考えたことを発表したりして話し合おう。</li> </ul>

**Q 5 児童の学習内容を理解する速さや課題を解く速さに個人差がありすぎて、全体指導と個別指導のバランスの取り方に苦労しています。何かいい方法はありませんか。**

A 5

自力解決が難しい場合は、その時間を同時直接指導にして二つの学年を行き来して個別指導をする方法があります。また、終末の習熟・応用・発展の時間も同時直接指導にすると、学習内容の理解が十分な点を指導する時間をつくることができます。

(例)

下学年	習熟	課題把握	自力解決	定着	習熟・応用・発展	
わたり	自力	直接	同時直接	直接	自力	同時直接
	直接	自力	同時直接	自力	直接	同時直接
上学年	課題把握	自力解決		定着	習熟・応用・発展	

課題を解く速さの個人差の問題については、課題が終わった児童には、今までの復習、その時間の指導内容の反復練習、応用課題に挑戦といった様々な内容のドリルやプリントを用意して対応すること、ノートやホワイトボードを使って分かったことや気付いたことのまとめや課題の解き方などの発表準備をさせること、まだ課題が終わっていない児童にヒントを示す役割を与えることなどが考えられます。

**Q 6 5・6年の複式学級では行事（修学旅行、集団宿泊学習）の事前・事後指導が十分にできません。**

A 6

修学旅行の準備を6年生がしている間、5年生はどうするのか、集団宿泊学習の準備を5年生がしている間、6年生はどうするのかということを考え、あらかじめ計画を立てておきましょう。

まず、複式の授業をしながら行えることと行えないことを整理して指導計画を見直しましょう。

合同で事前・事後指導を行うことで生まれる教育効果があります。例えば、集団宿泊学習の事前指導において、6年生から昨年の活動の様子を聞くことで、5年生は具体的なイメージを持つことができたり、不安に思っていることを解決できたりします。6年生も、5年生との関わりの中で、成長を感じることができるでしょう。

単独でしか行えない準備や指導のときは、片方の学年の授業の指導を他の先生方に協力してもらったり、休み時間や放課後などを活用したりして準備や指導をしましょう。そのためにも、学校での協力体制を整えておくことが重要です。

また、行事を他校と合同で行う場合には、早目に担任同士が連絡を取り合い、役割を分担しておくことも必要でしょう。打合せの回数、当日までの準備、役割分担等の共通理解を図り、計画的に進めると、児童の事前指導の見通しも持てるでしょう。児童の自己紹介などもメールやファックスを利用すると、準備の時間の短縮になったり、互いを知ることで当日への不安を軽減させたりすることができます。

**Q7 複式学級での上学年と下学年のよりよい人間関係づくりの方法を教えてください。また、上学年の方に指導が必要な場面が多いときの学級経営の仕方についても教えてください。**

A7

上学年、下学年という前に、単級と同様に学年にかかわらずクラスメートとして全員で温かい学級を作っていくという意識を、まずは一人一人にもたせることが大事ではないでしょうか。

しかし、複式学級では、同じクラスの中に横のつながり（同学年）と縦のつながり（異学年）があります。横のつながりはもちろん大切ですが、縦のつながりを教師がより強く意識しておくことが大切です。そして、上の学年を下学年の「憧れ」にしていくことが、複式学級をもつ担任の大事な役目だと思います。下の学年は、上の学年に憧れて成長する。上の学年は、下の学年に憧れられて成長する。子どもたちに「憧れ」の具体を考えさせてみてはどうでしょうか。

また、複式学級の子どもたちは、隔年で上学年と下学年を繰り返していきます。例えば、3・4年生のクラスにおいて、3年生だった子どもたちが4年生になったとき、同学年のメンバーは代わらないのに、クラスの中での役割や立ち位置は変わります。そういう点も教師は踏まえておくことが大切です。5・6年生になったときに、3・4年生のときのことを振り返ってみて、成長した自分をクラス全員で実感するといった場の設定もあればよいと思います。

指導については、上学年であろうと下学年であろうと必要な指導はどんどん行うべきではないでしょうか。ただし、下学年の前で上学年を怒らないといった、先ほどの「憧れ」を意識した指導の方法は考えるべきです。上学年が指導によって良い方向に変わっていく姿を、下学年にしっかりと見せていくことで、上学年と下学年の信頼関係も作っていけると考えます。

**Q8 教室の掲示物について、効果的なものや変化のあるよい例を教えてください。**

A8

複式学級では授業準備等に追われ、教室の掲示物をどんどん新しいものに貼り替えていく時間を確保することが難しかったり、児童数に対して掲示スペースが広すぎ、持て余してしまったりという悩みをよく耳にします。書写コーナー、絵画コーナー、学級活動コーナー（係活動やめあてなど）、学習コーナー（漢字や算数の用語やきまり、歴史年表など）など、年度当初にある程度コーナーを固定し、「貼り重ねるもの」、「貼り替えるもの」、「貼り加えるもの」を分けておくとよいと思います。掲示スペースの使い方は、**本アイデア実践集5「小規模校や少人数学級における掲示」**に具体的な例が示されており、大変参考になります。低学年では、「1年間のあしあと」として、年表のように行事写真を貼り加えていくことによって、年度末、国語科や生活科などにおいて1年間の活動を振り返って作文等にまとめる際に役立つこともできます。

